

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*

## 快挙！戸田巽さん

「登ってきたで」と店に入るなり笑顔で報告される。私は駆け寄って手を握って「よかった、おめでとうございます」と言いながら言い知れぬ感動を覚えた。

「どうでした？ しんどくなかったですか。私は、登れないと思っていたんですよ」

「途中、腰痛で困ったが後半のコースで14キロだけ通行止めになっていてどうしても歩く事が出来ず、コースカットした。そのお陰で少しばかりの休養になって腰痛もやわらぎ、最後の富士山も、ゆっくりしたペースではあるが楽々と登れた。楽しかった。頂上では多くの方が祝福してくれた」

「よかったですね。凄いことですよ」

「まだ、実感はないが…」

「これから、マスコミや雑誌の取材が来ますよ。これは、間違いなく快挙です。世界的な快挙です。私が知りえる限りにおいて最高の快挙です」

「いや、それはわからんが、昨日もテレビ局から電話があったが適当に返事しておいた。騒がれても困るからなあ」

「何が凄いかと言って、ガンを二つも抱えながら計画通り88歳で、最も暑い時期、陽が照りつける暑い時間帯に走破する。これほど過酷な計画はない。あえてこの計画を立案し挑戦した戸田さんは称賛されて当然です」

多くの冒険や挑戦がある。事前にマスコミがはやしたてるのと、事後に注目される功績がある。今回の戸田さんの功績は後者である。友人など一部の人たちの協力を得ながら、ひとりで計画を立て周到な訓練をおこなう中で達成した目立たなく行なわれた計画であるが、人々が知れば驚嘆し自分たちに元気と希望を与えてくれる計画と思うだろう。厳しい行程ではあるが、誰もが挑戦できる可能性を持ち、日々の精進によっては高齢者でも可能である。ただ、八十八歳という年齢で達成するのは至難の業であると考え。将来この壁を越える挑戦者が現れることはないと思う。

歴史に名を刻む、人生の挑戦者であることを、今回の快挙が証明した、と私は考えている。

10月2日に報告会を兼ねたパーティーを開く予定と聞き、参加させて頂いて詳細をお聞きするつもりだ。(嘉)

## 連載 爺捨て山 31

梵店主

山の先輩から貴重な話を聞いたのでご紹介します。

「生ふき汁」の話です。一生に一度飲むだけで脳卒中にならないという有難い飲み物の作り方です。

一、鶏卵の白身(一個分)

二、ふきの葉の汁(小さじ3杯。ふきの

葉を三〜四枚刻んで摩り潰し、布濾

しする)

三、清酒(小さじ3杯)

四、梅(塩漬けて柔らかくなったものを摩り潰す)

以上をよくかき混ぜて作る。

ポイントには、春の大きなふきの葉を使うこと。青梅は使わず、日陰で日光に当てずに乾かしたもの(これが大事で、秘蔵の蓄えがあるから、わけてやる、と親切に言われる)。

この「生ふき汁」の効用は、老人会や職場のOB会など多くの人で実験され、効果があるらしい。

なにしろ、一生に一度飲めばいいのだから、こんな有難い薬はない。どうか皆さんもお試してください。私も、来春は是非とも飲みたいと思っております。

インターネットでも幾つかの方法が紹介されておりますのでご参考にして、試してみてください。

ガルムツシユ峰 ⑩

貸店主

よっちゃんは、小さな缶をよく見た。何も書かれていないが、ピカピカの新品である。岩陰に置かれていたといえ、昔の物ではなさそうだ。

由べえが「やつぱり、オーストリア隊が登っていたんですね」とため息混じりにいう。

よっちゃんは、英国の山岳雑誌にオーストリア隊がガルムツシユ峰に試登した、という記事を読み出した。小さく書かれた記事を見たのは、日本を発つ前であった。その記事を深く理解しようとはしなかった。いや、したくなかったのだ。これまで苦勞してきたものが瓦解するようには思えたからである。会社を辞め周りの反対をおしてまで進めてきた遠征計画で肝心の山が低くて既に登られていては、あまりにも意欲が萎えてしまう。せめて初登頂の夢だけはかなえたかったのである。

由べえは、少しも気落ちした様子はなく、ピークに続くであろう稜線を熱心に見ている。「どうや、いけそうか」と声をかけると「雪壁が続いていますが、岩より登りや

すいでしよう。わかりませんが」「続けてトップいくか」

「いいんですか、僕が登っても」と由べえは、先輩であるよっちゃんを気遣っている。次のピッチはピークに立てる可能性があるから、先輩にトップを譲り登頂の榮譽を与えようとする後輩の暖かい心遣いである。

よっちゃんは、オーストリア隊が登っていた初登頂の希望が消え落胆した姿を、由べえに見せないように気丈に構えなければ、と思いつつ、力が抜けていく感じであった。

由べえの気力と技術を信用して最後の雪壁をトップで登ってもらおう、とよっちゃんは考えた。いや、よっちゃんは、雪壁の登りは苦手であったことも事実だった。それに対して、由べえは冬の氷爆で氷の壁登りを訓練をしていたから、彼の方が勝っていたのである。「最後のピッチになるかもしれないから、気をつけてな」

「じゃあ、確保をしつかりお願いします」と言つて、由べえは登りだした。彼は、片手でピッケル、片手はアイスバイルという氷面に突き刺すハンマーを持ち、両足に付けたアイゼンを交互に蹴り込みながら登って行く。途中アイスハーケンを二本ばかり打ち込んだ。あまり効いているようには見えなかったが、気分的には安心する。登り始めて、一時間が過ぎたと思える

時、「登りました。ピレーを取りました。登ってきて下さい」という由べえの声が聞こえた。

よっちゃんは、「登ったか。よかった」と思いながら「登ります。確保お願いします」と大きな声で叫んだ。すぐに「了解しました」と応答があり登り始めた。

天気は快晴雲無く、風も無く最高の日だ。氷の斜面はコンクリートのように硬く、よっちゃんのアイゼンは、ほんのわずかし刺さらないが、由べえが確保してくれているザイルのお陰で安心して登れた。

頂に着くと、「ここがピークです。ここより高い所はありません。北峰のピークもここより低いですからガルムツシユ峰のピークはここです」と由べえは嬉しそうによっちゃんに言った。よっちゃんは、「由べえ、お前よく頑張ったな、お前のお陰で無事登ることが出来た。ありがと」と言いながら、下る事を考えていた。登れたが、無事おられるだろうか。

ピークの北側を見下ろしていた由べえは、興奮した様子で「すぐききれいなヒマラヤヒダが見えます。よっちゃん達が立っている頂からスパツと千数百メートル落ちるように、雪と氷からなる一直線の山稜がチャンタール氷河に向かって真っ直ぐに続いていた。数え切れぬほどのヒマラヤヒダは、氷河の両側斜面を形つくり神秘的な世界を見せていたのである。

義兄とその家族 20

「あ、おった？」

関西人にしかわからないかもしれない電話の「もしもし」代わりの言葉。「家に居たのか？」ということなのだが、姉はこれを声をひそませてというのか、声を出さずに息だけで言つて電話してることがある。いまでは慣れたが、それでもドキツとする。母が死んだとか弟が交通事故だと言うのではないかと一瞬、息を飲む。それぐらいせつば詰まった悲壮感あふれる第一声なのだ。

「どないしたん？」

「ちよつと聞いてくれる？」。これで私は止めていた息を再開する。家族の誰かに何かあったというわけではないことがわかつて、ホツとしつつ（内心はややムカツいている。毎々、たいそうな声出しやがって！）、「ええよ、どうしたん？」。

ムカついてはいても、たいがい、姉の話は下手なドラマなんかより面白いので（私にとつて、だが）、受話器を握り直し、立っていたら座つて態勢を整える。

「もう、あきれてサ」。このフレーズで始まるのは自分の息子一家の話、はつきり言えばヨメの悪口である。（母と弟に絡む話の枕詞は「アンタ、知ってた？」である。）



姉の話はいつもやたら前置きが長い。声をはひそめ、本人的には死ぬほど深刻な話でも、ボンと要点には行かない。その糸余曲折も、ヒマなときはそれなりに楽しめるのだが、かいつまんで書くと、姉の家に、息子の中学時代の同級生から同窓会の案内とおぼしき封書が届いた。封筒の裏に3年2組森本〇〇とか書いてあったらしい。息子は結婚して別のところに住んでいるので、姉は自分が歯医者に行くついでに、息子の家に届けることにした。その日は水曜日。姉の息子は不動産関係の仕事で、土曜日曜は仕事に行くことが多く、水曜を本人の定休日としている。肺ガンをわずらって休職中の義兄は喜んで姉のお供をすることにしたらしい。歯医者までついて行って、終わるのを待って、二人で息子の家にまわることにしたのだ。

「幼稚園が夏休みやから、どっかへ遊びに出かけるかもしれないけど、留守やったらポストに入れておいてもええし」と思て。姉はそうは言うが、やっぱりおチビの孫たちの顔が見たいのだ。もちろん、義兄も。それでなければ、この暑さのなか、住まいから結構遠い歯科医院まで用もないのに、わざわざ出向こうとは思わないはずだ。その歯科医院からさらに離れた息子の家まで運転していこうと思ふのも、孫の二人がいればこそだ。歯医者を出たところで、姉は息子の家に電話した。家を出る前にかければよさそうなのだが、その歯医者名医で通っていて、患者さんが多い上に、一人ひとりを丁寧に治療してくれるので、終わる時間が読めないのだ。ヨメは超がつく几帳面なダンドリ人間。「いきあたりばったり」という言葉はこのヨメの辞書にはない。だから、適当な時間を言って、ヨメに謝るのもシヤクだと思つた姉は歯科医院を出てから電話した。

ヨメはそんな几帳面な性格だから、家はいつも完璧に片付いていて、いつ誰が来てもOK、いつ誰に來られても絶対に困る叔母（私だ）とは違う。ともあれ、その電話で「歯医者まで来てるから、この足で届けるワ」と言つたら、ヨメは「そんな手紙、いらんわ。そつちで捨てて」とのつけに言つたららしい。姉は「でも、森本くんからジュンちゃん（息子だ。姉は世間体を考えずに生きているから、ヨメの前では息子を呼び捨てにする、というような器用なことはできないし、す

る気もない）宛てにきてる手紙やから、ジュンちゃんに聞かんと勝手に捨てられへん。二ほんならジュンに代わるわ」とヨメ。最初から「ジュンに代わるわ」と言えヨ、と思うが、ヨメにはヨメの都合があるのだろう。

そして息子、電話口に登場。「同窓会？いらんわ、捨てといて」。「へ？」。もう道のりの半分は来ているのだ。幼稚園も夏休み。「そこまで来てるんやったら、手紙はどうでもええけど、寄つてえや」というのが、息子夫婦の礼儀というものである。あるいは、たとえウソでも「これから出かけるのとやつてん。その手紙は届けてくれるでええからね。でも、ありがとう、ごめん」ぐらい言うたらんかい、と思うが、言つてやつてくれない。もちろん、そう言つてくれていたら、あるいは、気分よく手紙をお届けさせてくれるは、孫と小一時間も遊ばせて、冷たいお茶の一杯でも出してやつてくれていたら、「あ、おつた？」という悲壮感で、ンコモリの電話はかかつてこなかった。姉はぼやく。「こつちから、用もないのに、あの子らの家に行つたことは1回もありませぬん」（腹が立っているとき、姉は何故かビミヨーな丁寧語で言う。「だまに、何か持つて行かなあかんときがありますわな、やれお嬢さんや、鯉のぼりや、誕生日やクリスマスやと。そういうとき、こつちはいろんなもの



# 「京鹿子幻影」あとがき

真志 清

筆者は、一時期、京都に於いて書籍販売会社に勤務していた。多くの人々と出会い、京の風物に接した。大正時代の、特に筆者（昭和七年生）より十一年前後年長の先輩たちの戦争体験の語り口は、心に重く響いた。九死に一生を得た人々である。死に損なつた、と自嘲した人もいた。

この小説は、当時の様々な見聞の中に題材を得た。登場人物は、全て仮名で、筆者の創作の部分は大であるが、全て架空の人物というわけではない。

昭和十八年十月二十一日、神宮外苑競技場に於ける、文部省主催の出陣学徒壮行会は、降りしきる秋雨の中、挙行された。関東地方の七十七の大学、高専、約七万の大行進のニュース映像を、戦後間もなく映画館で初めて観た時、若年だった筆者は、異様な感慨に打たれた。その後は、テレビでも度々放映された。出陣学徒壮行会は、大阪その他、各都市でも挙行されたようだ。

あの凛々しい学生たちは、当時二十歳前後の若者である。学業半ばにしてペンを銃に持ち替えさせられ、戦地へ送られた。

「生等もとより生還を期せず」と、学徒代表は、出陣の決意を高らかに宣誓した。

そして多くの青春は、洋々たる前途を絶たれて消えた。

京都大学生、北越直人。同志社大学生、安原修。この二人の心友も、愛する人々を残して戦死した。

『きけ わだつみのこえ』の書名は、公募二千の中から選ばれた。中扉の歌は、その命名者の作である。この歌も、読者の心を打った。

なげけるか いかれるか

はたもだせるか

きけ はてしなきわだつみのこえ

『きけ わだつみのこえ』の最新刊には、七十四名の学徒の手記がある。初版は七十五名だった。後になって、そ

の中の一人、戦死と思われていた人が、生きて帰ってきた。終戦後数年は、そのような事例がよくあった。敗戦国の混沌を物語っている。

最年長は三十三歳、最年少は十八歳、平均二十四歳で戦死した。

出陣学徒壮行会のニュース映像を観た時の衝撃と、『きけ わだつみのこえ』の読後の感傷が、執筆に際しての、筆者の精神の基調となっている。

この小説の書簡文の書き方について弁明しておきたい。

頭語と結語は、京子は、（拝啓、かしこ）、高井は、（謹啓、敬白）に統一した。時候の挨拶がない場合は、前略と書くのが手紙の作法だが、それも無視した。宛名も日付も省略した。京子と

高井の嵐山に於ける邂逅の日を平日に設定したので、日付を入れると、昭和四十五年二月の日曜日に当たると、矛盾が生ずる。一（章）を書いている時は煩わしいので調べなかったが、後日、万年曆等で検索して、その月の日曜日であることが判明した。労を厭わずに日付を書くべきだったか。

尚、余計なことも書く。六月末、大腸内視鏡検査のため、済生会千里病院へ二泊三日の入院を余儀なくされた。

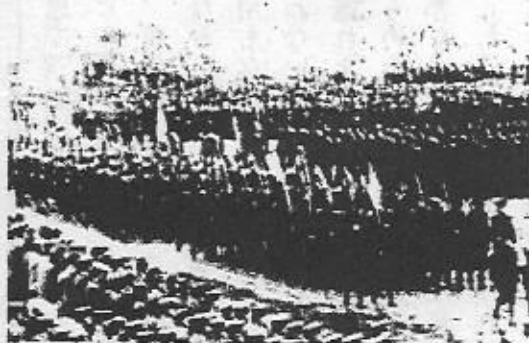
この小説の最終の二、三枚が渋滞していたので、原稿を携帯した。三十日午前、検査は無事終了、異常無しで安堵。午後はベットで二、三時間安静のあと、起き上がって病室の窓辺のテーブルに對した。東に面した病棟の五階の窓から千里の街の東南の一角が、くもり空の下に遠望される。前日から絶食のため体力は当然低下していたが、頭脳は不思議に明晰であった。前夜は断続して二時間ほどしか寝むれなかった。

覚醒している時は、この物語の最後の場面を考えていた。

鉛筆はすらすらと動いた。そして終わりに、二人の女の残像が泛び上がり、脱稿となった。

月刊『芥川だより』と筆者との機縁について書きたい。

筆者は若い頃から、あちこちうろついてきて、五十の時に、サンポロビル大阪工場（茨木市、現在は撤退し、跡地に立命館大学の学舎が建つ予定）内の協力会社、寺井興業株式会社の従業員として、2000年末まで諸作業に従事した。その間、サンポロビルの皆さんの御世話になった。その中のおひとり、エンジニアリング部OBの、泉佑司氏の紹介で、昨夏、月刊『芥川だより』の知遇を得た。拙文を採用し、連載して頂いた編集発行人、下村嘉明氏へ、深く謝意を表したい。



学徒出陣壮行会（昭和18年10月21日）

ドイツ時代④（70年12月―75年5月）

土田 裕

## 語学力

ドイツ語は大学の教養課程の二年間、第二外国語として習ったが、当時の授業は読本（和訳）が中心で和文独訳の授業はほとんどなし、まして会話の授業はなく、先生もドイツ語会話はできなかったのではないかと思う。ドイツ転勤が決まってからあわててリンガフォンなるレコードを買って3ヶ月ほど聞いていたが、その程度の勉強でものになるわけもなく、「着任すればなんとかなる」と腹をくくっていた。また当時の三井物産の海外転勤時の語学力の条件は英検の準一級以上であり、私は神戸支店にいた時に、パルモア学院なる夜間の語学学校に通って勉強したおかげで英検は一級を通過していた。

着任してから分かったことだが、ハンブルグ店の邦人社員十名の内、ドイツ語会話が問題なく出来るのは修業生を除いては「社宅」の項で触れた繊維課長一人だけであった。三井物産には海外修業生制度があり、毎年、米、英、加、独、仏、伊に一二名ずつ派遣される。彼らは一年間、派遣国の大学で勉強し、後一年は同国の店で実務研修

（お礼奉公と言っていた）を受けることになるが、件の課長はドイツ修業生経験者であった。

私が着任した当時は赴任してすぐ日常業務をやらされたが、一年後には語学研修制度が出来て、新任者は着任後三箇月はゲーテ・インスティテュートで語学研修を受けることになった。残念ながら三カ月でドイツ語をマスターすることは難しく、私のあとから着任した人でドイツ語を話している人にお目にかかったことはなかった。

ハンブルグは昔のハンザ同盟の首都で専門商社が多くあり、商談も英語で通じる客先が多いので、邦人社員はそういう客先を相手にし、ドイツ語で話さなければならぬ客先は現地人スタッフに任せていた。

日本側から新商品の売込みがあると現地人スタッフに任せてしまうので一向に話が進展せず、赴任前打ち合わせの際「現地に行ったら新商品はあなた自身が担当するか、現地社員をうまく指導して新規開発商売を実現するように」といわれていた。英語でしかコミユニケーションが出来なければ、当然客先は限られるので現地スタッフと片言でもドイツ語を話すよう心がけた。またアシスタントのフラオ・ミュラー（ドイツでは相手を性で呼び、未婚者はフロイライン、既婚者はフラオを

つける）は親切で有能な女性であったので、私が英語で要旨を言うとドイツ語で立派な商業文を書いてくれた。

私見ではドイツ語に限らず、英語でも言葉が達者であることと営業能力は関係なく、往々にして外国語が上手な人は余計なお喋りが多いので相手に軽くみられて商売を逃す傾向があった。大阪支店の私の上司で私をドイツ物産に送り出してくれた京大出身の課長は英語は決して上手くなくとつとつと話すタイプであったが説得力があり米国内に三回、通算一五年勤務し最後は常務取締役まで栄進した。

## 現地社員

ドイツ物産物産課は、課長と私の邦人二名、現地人スタッフ四名で構成されていた。ドイツ物産に限らず、邦人スタッフの給与は現地人スタッフの二―三倍であったと思うが、かといって当社の現地社員給与が他社と比べて低いわけではなく、邦人社員の給与が高いのは家賃など外国に居住するための余分な費用が含まれているためである。

年齢の高い順に当時の現地社員について思い出を記してみる。

★ジョージ・ニーマック：男性。

私とほぼ同年代。プロンドGICットで長身、子沢山で四人の子供がいた。

担当は葉たばこ輸入、パイラントガス湯沸器輸出。三井物産は日本専売公社の代理店で日本、泰、ブルガリアなどの葉たばこを専売公社のみならずドイツのタバコ会社にも売っていた。英語は堪能で如才なく、日本から来る当社社員、顧客の評判はよかつたが、キャパシティが小さく、新しい商材に興味を示さなかった。

★ライナー・キルムゼ：男性。

私より三歳若く、長身、白髪・碧眼の好青年。ドイツ人は、プロンドは多いが白髪は珍しい。本人は余り話しながらなかったが、生まれはポーランドで第二次大戦の後、両親がドイツへ移住したらしい。美人の奥さんとの間に子供はいなかった。私が着任するまではニチアスのアスベスト製品、サクラマーキングペン、傘の骨などの輸入を担当していたが、私が大阪店より持ち込んだ自転車部品の輸入商売を担当し、百万ドル以上の商売となった。

彼との一番の思い出は、ドイツの自転車メーカーではナンバー2のカルコフ社とのラグ（自転車フレームのジョイント）の現地生産会社の契約交渉に何回も同社に通い、一年以上かかって漸く契約成立に持ち込んだことである。相手の社長はドイツ語しか話せぬため、私が日本メーカー常務の意向を英語で彼に説明し、彼がドイツ語で相手社長に伝えるという非常に根気の要る交渉が続いた。もっとも困ったのはジョイントベンチア契約の「解散条項」で

通常の契約は、会社の解散時、資本金のシェアに応じてロスを分担するが、メーカの要望で資本金の大半は自分がだすので、ロスは技術を持っている日本ドイツ側は日本側が負担するのが筋であると譲らず、江戸っ子の日本メーカ社長は「ややこしいことは言わずに腹と腹で行きましようよ」と浪花節を言い、まとめるのに大変苦労した。カルコフ社への往復はいつも彼のフォルクスワーゲンで通ったが、交渉が長引くので帰りはいつも真つ暗なアウトバーンを時速百四十キロで飛ばしていた。

私が帰国してから二十年以上経って、同君がアウトバーンでの交通事故で急死したとの訃報が舞い込んだ。  
★フラオ・ミニユラー：女性。  
年齢は多分四十半ばであったと思う。私のアシスタントでプロンド、貞淑な人妻という感じであった。彼女に限らず一般にドイツ人は家庭のことは一切話さないで本当のところは分からぬが、子供がいけない関係で旦那とはうまくいっていないという話であった。「語学力」の項で述べたが、彼女にはドイツ語のコレポンドで大変お世話になった。

★フラオ・フリュー：女性。  
ニーマツクのアシスタント。独身でも少し歳をとっている女性の場合は敬意をこめてフラオという。縦も横も大きな女性で百八十センチくらいの身長があり、

### マナーのこと

四十年前の海外店にはまだまだ封建的なところがあって、城山三郎が「毎日が日曜日」で書いたような邦人間の葛藤は現実に起こっていた。ここでは私個人の失敗談を記してみ

るので、当然その店のやり方は知っているのだから、私に直接言ってくればよかったのにと思った。その後、度々「シェリー」に接待で通うことになるが、ドイツ人客はチップがもつたいないので自分で女を呼びに行っていた。

着任して一週間も経たないころ、日本からのお客をハンブルグ中央駅近くの「シェリー」なるバーにお連れした。このバーはレーパーバーのテレフォンバーと異なり、それらしい女性も客としてあちこちに座っているのだが、テーブルには電話も番号もなかった。案の定、お客が「あのテーブルの女を呼んで欲しい」と仰るので、恥ずかしながらそのテーブルまで女を呼びに行つて、我々のテーブルまで来てもらった。

翌日、出勤したら課長が渋い顔をして、「君は昨夜、シェリーで立って女を呼びに行つたらしいが、恥ずかしいことをしないで貰いたい。そういう時はウエイターにチップを渡して呼んで貰うものだ。」と文句を言われた。

同じ店に食品課の担当者も接待で来ていて、私の挙動を見て、物資課長に告げ口をしたらしい。食品課の担当者は私より二年前に着任してい



## 宗教

私も新興宗教に入っていたことがある。十三、十九歳の頃に創価学会に入っていた。切っ掛けは兄の勧誘である。我が家は母子家庭であり兄の影響力は大きかった。母が入り、嫁いだ二人の姉達が入り、私が入った。

兄の切っ掛けは知人から「その脚が治る」と言われたからだ。

兄は幼い頃に火傷をして脚が曲がらなくなってしまう。母はそのことを終生、悔いていた。

早く医者に見せていけば脚は曲がるようになったかも知れなかった。しかし、それが出来なかった。舅と姑が「押めば治る」と言って譲らなかつたからだ。舅と姑は熱心な真言宗の信者だった。ひたすら護摩を焚いて兄の脚の治癒を祈禱した。しかし、兄の脚は曲がらなかつた。

それから二十年後、今度は兄が知人から「押めば治る」と言われたのだ。兄は欣喜したに違いない。

それから五十年間、兄の脚は治っていない。しかし、兄は信仰を続けている。奇跡が起こることを信じながら。

私はある出来事が切っ掛けで信仰を止めた。大学入学してすぐの頃、創価学会が支持する公明党の選挙運動に駆

り出された。個別訪問をして投票を頼んだ。

「クリーンな庶民の政党です。選挙違反は一度もない」。幹部に教えられたまま、ふれ回った。

ところが、ある家で反撃された。「嘘を言っちゃいかん。なんぼでも選挙違反をしてるやないか」。衝撃を受けた。図書館に行つて過去の新聞を調べてみた。違反は事実だった。

「あの人達の言っていることは嘘じゃないか」

大人に初めて騙されたような気がした。しかし、悪いのは自分だった。

「自分に何もないから人の言うことを鵜呑みにしてしまうんだ。自分を確立しなければ……」と自己嫌悪に陥った。

以来、その答えを求めて古今東西の書物を読み漁った。宗教書・哲学書・思想書・文学書など。

それから四十年が経った。未だに途上にある。本を読めば読むほど自分の無知さを知るばかりだ。自己の確立など程遠い。

ただ、二度と宗教に頼ろうとは思わない。理由は科学的でないからだ。

キリスト教の『ヤハベ』も『復活』も、仏教の『如来』も『輪廻転生』も見たことがない。そんなもの、信じると言うほうが無理だろう。

自分と同じ顔の人間がいらないのと同

じように自分と同じ考えは二つとない。自分の人生は自分で考えて生きるしかない。孤独だけれどそれが『人間の宿命』だと思っている。

しかし、宗教を否定はしない。宗教で心の安らぎが得られる人もいる。私の兄がそうであり、妻がそうである。

《龍》

## 俳句

土田 裕

- 箱根路や尾花は波のごとく寄せ
- 韋駄天は遠き日のこと運動会
- 坂多き街に住み慣れ涼新た
- 新刊のページ繰り行く良夜かな
- 湯の宿の化粧水とてへちま水
- 大船渡秋刀魚水揚げ報じけり

晶男



現地職員の昼食は非常に質素で、パンと飲み物を買ってきて事務所で済ませるのが一般的であったが、邦人社員は連れ立って事務所の近くの中華料理かチッキンの店に行くことが多かった。テーブルと椅子の間隔がせまいので支店長、課長など偉い人を奥に座らせるとトイレにたたれる時、後に座った人がいちいち立たねばならないので、私が先に奥に座るようにしていた。ある時、課長が「君は上の人に断りもなく、先に座るがそれは礼儀に反するからやめなさい」という。たまたま、その時だけ一言言うのを忘れたただけなのだが。

当時、ドイツ物産の本店はデュセルドルフにあり鉄鋼、機械、化学品などの重工業部門は本店に属し、繊維、食品、物資の軽工業関係がハンブルグ店に属していた。人的には繊維部門が大坂支店から、食品が東京本社から、物資部門は課長が東京、担当者が大阪と分かれていた。

私の印象では東京本社から来ている人は行儀にうるさく、細かいことを気にするタイプが多かった。これに対し、大阪人はあまり細かいことは気にしないので彼の地でそのようなことで上司に文句をいわれたことはなかった。当時は私も若かったのでついつい反抗的な態度をとることもあったと思う。

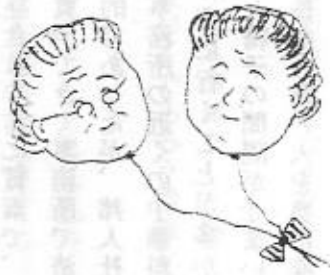
心が渴かぬうちに

年令を受け入れて、楽しく生きる。したいことを楽しむ。何才になっても老いに不満を持たず、自分が出来ることの中に楽しみを見つけている。すばらしい生き方だと思ふ。

老いることへの焦りは誰にもある。毎日が無為に過ぎてゆく淋しさ、むなしさは高齢者にとっては避けられない道。

でもこれは、自分の心のあり方、人生を「若い頃」「中年期」「高齢期」と分析すると、最後の「高齢期」が一番長い。

その時間をどのように過ごすか。目的を立てる。何も用事がなくても一日一度は出掛ける。一日一度は誰かと話す、電話でもいい、心が渴かぬように考えるのは、自分自身です。「ときめき」は、難しくも、生きて生かしてもらって、毎日が無事に送れる。その一日一日が幸せだと思ふ。



これは心から話し合える友達との会話の一部で私は、高齢道中記としてメモしていくつもり。

見知らぬ人に声かけられて

「まあ、こんなところで出会うなんて、ご機嫌さん。あんたとこの家、二階から見えますのや。声をかけようと思ったら、スーと家の中へ入らばったさかいな」

「でも、私はあんたはんの顔見覚えないけど…」

警戒心も、ほとんど感じることなく、聞いていたのだが、どうも変だと感じてきたのは数分たつてから、最後の一言：「千円貸して下さいな。車の中に買い物をして、息子にサイフを渡したまま出て来たから、すぐ返すから」

さあ、返事に困った。私の目的は美味しい一口入りのパン二個だけ買うつもりだった。サイフの中身はたっぷり、でも待てよ。

腹の中を見透かすような目つき、只ならぬ人。笑っている顔を見たら、これはよっぽどの常習犯だ。この年寄りから金を借りて返す気もないのに

「ちよつと急ぐのでゴメンネ」と振り返ってみたら、もう姿はない。

自分のやっていることに何の恥じらいもないのだろうか。それとも、なんとなく人懐こい気分が強くなり同年齢位

の人に親しくもないのに声をかけたくなつた出来心なのか。

そのあたりが、もし年令と関係あるなら、やたらと気楽に見知らぬ人に声をかけることもあるまい。天気の良い日、ぐらいいいと思ふ。

歳をとるにつれ、自分について、いろいろな事がおこる。体力の衰え、頭の鈍化、つまり物忘れ、これは仕方がないかと、やはり、どこかに年令の影がゆらめく気配が感じられる。



編集後記

「負けるな！よっちゃん」の評判がいい。恐縮するほど褒めてくれる読者が多い。知人や後輩に読ませてやりたい、と何冊も買って下さる方もある。

軽い気持ちで書き始めた文ですが、これ程長く書き続けるとは、思っていなかったし、みんな喜んで頂けるとも思わなかった。特に意外だったのは、山の先輩たちの奥方が喜んでくださったっていることである。

ある先輩などは、自分が読もうと思っていたら、奥さんが取り上げて読み「おもしろかったわ」と言われたとか。どこが面白いのか聞いたら、気取らない本音が書かれているから、素直に楽しめるらしい。

しかし、親しい先輩は、「わしは精読したで、それで感じた。君は人生をなめとる」と。酒を飲みながら言われた。私が、ギクツとした。私の一番弱いところを先輩は読み取っていたのだ。もつと精進を重ねないといけないと反省した。

『人気のデザイン』

☆

裏地にキルト綿をつけませんか？

☆

9・10月分は従来通りのお仕立て代で承ります

(25,000~28,000)

軽くて温かいと好評です

着物から服を仕立てます

梵~ほん~